藤井日達 著

『わが非暴力
── 藤井日達自伝 ──』

春秋社　1972年　264ページ

はじめに

本書は日本山妙法寺の最高指導者である藤井日達(1885～)の生いたちから今日にいたる自伝である。その成立のいきさつは末尾の山折哲雄氏による「あとがき」に詳しい。その山折氏の論文「インド体験型アジア主義の一類型──藤井日達の場合──」は本誌の昭和48年9月号に掲載されており，当然そこでは藤井の生涯にわたる思想と行動に多くの言及がなされている。上人の業績に詳しい山折氏の論稿であるだけに，それは一面では評者をおおいに裨益するとともに，他面そのあとから本書の書評をしたためることがまことにつらい仕儀となった。しかし，本書が，日本人としてアジアをその全体的規模において体験した人物の記録としてほかにほとんど類を見ないものであり，また明治以来3代の大陸布教史のひとこまを示すものとしても重要であるので（すべてが語られているかは別として），山折氏の論稿との若干の重複をかえりみずあえて本書の各篇ごとに若干の感想をしるしてみたい。

なお，藤井の著作目録として「藤井日達綜合資料目録」が『サルボダヤ』誌の73年3月号から74年2月号にかけて全10回にわたり掲載されたことを付記しておきたい。

I　第一篇　試　煉

藤井上人は阿蘇の農民(おそらく貧農)の子として1885年に生まれた。この1885（明治18）年という年は，福沢諭吉がその『時事新報』に「脱亜論」を発表した年として，また同時にインド国民会議派がボンベイにその誕生の声をあげた年として非常に重要な年であり，一方における日本の植民地帝国への発展と他方におけるインド民族運動の成長とは藤井の行動を規定する重要な要因となるのである。

小学校を卒業した彼は隣県の臼杵農業学校に入学する。この臼杵は，大正および昭和の前半期を通じてのおそらくはもっとも傑出したアジア研究者であり，その中国認識における弱点がわざわいしてのちに軍部に協力して「満州国」建国に走ることになった橘樸が，藤井よりも4年早い1881年に出生した所である。しかし藤井は臼杵ばかりでなく，のちの満州時代にも橘とまったく交渉がなかったことは評者が直接に確かめえたところである（72年10月7日)。農業学校卒業と同時に臼杵で出家した。排仏毀釈の当時における余波について数カ所でなされている言及が興味をひく。出家の翌年に立正大学の前身の日蓮宗大学の第1期生となるべく上京し，2年半の間法華経を研究した。それは日露戦争の戦中・戦後の時期であったが，この時期に日本をつつみこんだ排外主義的愛国主義は彼をまったく感化しなかったのであろうか。

彼は上記を卒業してから数年後の法隆寺勧学院在学中に，はじめて焼身修行（線香による）を行なっている。これを彼はその後5回行なうが，それらはいずれも人生の岐路にあたってのことであったという。この最初の場合は寺に入るか否かを決心するためで，修行中にみた夢を手がかりにしてこの問題を解決している。あとの5回の場合については，本書はふれていない。やがて藤井は堅田に説教所を開くことになるが，このとき彼はかつて京都妙顕寺管長にさとされたつぎのような言葉を思い出した。「……お坊さまというものは本ばかり読んでいてもあかんのだ。お坊さまはまず寺を経営せねばならぬ。……寺の経営というものは学問とちがって容易ならぬことだ。おまえのように本ばかり読んでいては，そういう苦労はできないし，わからないな……」(43ページ)。これは認識一般の問題に共通するある真理をついた言葉であろう。

藤井はあるとき比良山中で滝にうたれながら1週間の断食をし，その最後の頃にみた夢から一つの示唆を受け取ったが，さらに奈良の桃尾の滝で同様に1週間の断食をし，満願のあけ方に一つの幻影を見，そこに法華経のもっとも重要な一節が具現されているのを見てとり，それによって「ただお太鼓を打ってご修行することに私の一生を賭けようと決意した」と述べている（53ページ)。1916年，数え年32歳のときである。ここのくだりは第一篇でもっとも迫力のある部分といえよう。

II　第二篇　激　動

本書で藤井上人は日蓮の高弟の1人日持の故事にならっ

ってアジア大陸の開教に従事することを早くから願っていたと述べているが，実際にはこの願望の実現は非常に曲がりくねったコースをたどった。彼は母危篤と知っていったんは朝鮮に渡り，その後インドに直行しようとしたが，1917年から23年まで中国東北および華北の各地を転々とするのである。この間，1918年には遼陽に開山してはじめて日本山妙法寺を名のり，23年には天津に開山して華北布教のスタートをきっている。彼は「搾取機関」（79ページ）としての満鉄を批判するが，藤井たちの日本山の活動に対し日蓮宗が関東庁を通じて圧迫を加え，その日蓮宗その他の既成教団の満州進出を満鉄が援助する関係にあったという。藤井はまた在住日本人の生活態度をきびしく批判する(85ページ)。たしかにアジア各地での日本人の生活態度は1920年頃の当時と今日を比べてみて，なにほどの進歩もみられないであろう。ただし藤井の批判が日本の植民地支配そのものへの批判となったかどうかは疑問である。藤井は満州と天津である「支那浪人」にいろいろと助けられているが，これは少なくともこの時期においては日本山の活動が無害であるとみられていたことを物語るものであろう（この人物がだれであるかは記憶にないと上人は評者にこたえられている)。

なお，「満州国」時代になってからは日本山は協和会に関係をもっていた（157ページ)。笠木良明もその信者の1人であった。また，国務総理張景恵の長春仏舎利塔建立計画に対し関東軍が建国神廟（天照大神をまつる）との関係から強く反対したという事実（175ページ)が明らかにされている。

関東大震災によって藤井は大きな衝撃を受けるが，それは，日蓮の『立正安国論』に教えられて内外での戦争の危険を感じたからであり，この部分は第二篇中もっとも迫力をもつ。彼は大陸布教を中止して帰国し，日本国内で妙法寺を建てることに力を注ぎ，インドに向けてたつまでに全国13カ所に妙法寺の建立を終えた。

III　第三篇　転　身

1930年，藤井はいよいよ西天開教の旅に出た。46歳である。途中上海に立ち寄っているが，上海事変が起こったのはそれよりもおよそ1年のちのことである。その口実となった日本山僧侶の虐殺について，彼は日本山と軍との共謀を否定している（168ページ)。

インドに第一歩をしるしたのは31年1月である。西天開教における彼の目的は法華経にいう「還来帰家」であるとされるが，それはあたかも日本の仏教はインドに帰るという日蓮の予言の真実性を現実に働きかけてゆくことによって立証するとでもいうべき意味をもっていたようである(121，126ページ)。それと同時に藤井はガンディー指導下の民族運動に強い関心をもち，これに背を向ける日本のあり方に批判的であった。当時，日本では植民地問題の研究はまだ始まったばかりであるから，藤井のこのようなインドへの関心のあり方はユニークであったといえよう。ただし，インドの民族運動の中心組織である国民会議派はこの同じ31年にガンディー＝アーウィン協定を承認し大きな曲がり角を曲がるのである。

さて西天に足を踏み入れた上人は，釈迦生誕地の復興をもくろんだが，これは失敗した。この生誕地はネパールにあるが，現在この地には仏舎利塔が日本山の手によって建立中で，1974年11月落慶予定といわれ，73年末から74年初めにかけて上人みずから約1カ月半の間陣頭指揮をとった。実に40年ぶりの悲願成就といえよう。

ボンベイやセイロン滞在ののち，藤井は33年10月にインド中央部のワルダーのアーシラムではじめてガンディーと会見した(ガンディーが16歳年長)。この時期は会議派の運動にとっては「敗北と降伏」（スバス・チャンドラ・ボース）の時期であった。しかし，みずから糸をつむぐガンディーを見て，藤井は「翁はインド人のために絹とか，綿とかいった物質を着せようとすることのほかに，もっと別な大事な着物を着せようとしている……」（142ページ）と感ずるのであり，その彼のなかに仏教を見出すのである。このような見方の当否はひとまずおいて，この場面は第三篇でも圧巻である。

つづいて藤井は現在のインドに目を転じ，ネルー，カーカー・カレルカール，ビノバ・バーベなどの指導者を批判しながら，ガンディーの思想がすっかり忘れ去られているとし，とくに中印国境戦争といった国際紛争に武力を用い，それを正当とみていることをきびしく追求する(146～148ページ)。この点は，会議派が軍隊などの国家的暴力の所持をいつから正当化するようになったか，インド憲法における軍事に関する規定のあり方はどうか，などともからみあう重大な問題である。なお，巻末年表によれば藤井は中印戦争直後の63年2月にインド東北国境地域（主戦場となった地域）を視察し，ネルーに印中不戦をといている。

35年に藤井はインドにおける活動の本拠をカルカッタに移しているが，日中全面戦争が始まると38年に帰国した。そして，陸相，海相を含む多数の陸海軍将官を訪ねては仏舎利を配っている。このことは明らかに侵略拡大

を防ぐには役立たなかった。ただし藤井は彼らに対して中国からの日本軍の撤退をといたという。

当時，中国本部の日本占領地域には「宗教連盟」というものが軍のきも入りでつくられたが，日本山はこれからしめ出されたという。日本の僧侶は実に軍装をしており，日本山がこのようなことから距離をおいていたことは注目に値する。しかし，この時期を含めて，明治以後3代にわたる日本人のアジアにおける布教活動の実態はまだほとんど明らかにされていないといえよう。南京陥落の折の一番乗りは玄題旗をかざした3人の日本山僧侶であるが，これが藤井のいうように軍部への協力を意味しはしなかったにしても，また大虐殺の際に紅卍会とともに死体処理につとめたということがあるにしても，評者にはよく理解できない。

こえて太平洋戦争中のさんたんたるインパール作戦となり，藤井は軍の宣撫工作に協力することを断わり，また，日本軍の協力を仰いだボースの態度にも納得できなかった。このとき日本山からは藤井に代わって丸山行蓮が参加した。『サルボダヤ』に73年2月号まで16回連載された「アラカンに轟く太鼓」はこのとき丸山に従った今井行順の手記である。

藤井は45年4月から朝鮮で布教中に日本の敗戦を迎えた。橘樸が敗戦後も帰国することなく瀋陽で病死したのに対し，そしてこのような死に方が日本とアジアとのかかわりにおける戦前と戦後との断絶を示唆しているのに対して，ほぼ同年配で61歳の藤井はその生涯の軌跡をさらに戦後に向かって延ばしてゆくことになる。

Ⅳ　第四篇　開　華

敗戦によって帰国した藤井は，郷里に近い阿蘇の山中で考えをこらし，そこで行なった断食の最後に熊本に仏舎利塔を建てることを決意した。そして非常な苦心の結果，54年までかかってその落慶にこぎつけた。彼はこのときすでに70歳である。その完成は彼みずからが日本山の歴史において画期的と呼んでいることなのだが，これによって戦後の時期に向かっての確信を深めたにちがいない。ただ，本書からは阿蘇での数カ月の思索中に彼がそれまでの半生をどう総括したのか，敗戦によって戦前との断絶をみたのかどうかが不明である。

藤井は54年に戦後はじめてセイロンとインドに旅行し，以来ビハール州の王舎城の仏舎利塔建立につとめ，56年の仏滅2500年祭の折にネルーを長としてつくられた王舎城復興委員会のメンバーに名を連らねた。この宝塔はガンディーの生誕100年にあわせて69年に盛大な落慶供養を行なったが，会議派公認候補を破って大統領に当選したばかりのギリもこれに出席している。54年の戦後第1回の訪問以来20年にわたる今日までのインドとの関係のなかで，この王舎城の宝塔建立は中心的位置を占めるものだろうが，藤井および妙法寺の活動はそれによって一段落したのではなく，全インドにわたる開教をめざし，そのため弟子の1人1人が個別の事業に責任をもつようになれと指示している。なお，ビハール州の観光課長が宝塔所在地までのリフトの収入の一部提供を申し入れたときの藤井の断わり方はみごとであり，第四篇でもっとも印象的である。彼はいっている。「だいたい宝塔さまはインドに本当に役に立つあいだは自然に保存されるはずだ。……それが，あなたがたの手で保存を考えなければならないようになったときは，もうこの宝塔さまが保存せんでもいいようになったときなんです。もはやインドには要らなくなったときなんです。そういうときには委員会なんか作ってもとても追いつくものではない」(223ページ)。

戦後の時期に藤井は砂川や三里塚の闘争，また本書にあらわれていないが原水禁運動に参加したが，これらについてははぶく。

インドにおける彼の活動にはガンディーとの関係もあってバジャージャとくにビルラのような有力財界人がその影を落としている。ただし，王舎城落慶のあとで付属の大講堂建立のためにギリが任命した委員会に財界人が多いとして藤井が反対しているのは興味をひく。さらに彼の日本外交官批判は非常に鋭くきびしい（87～88，92～93，129～130，162，204～206ページ)。彼が「日本の大使とか領事とかいうのは，インドの現実やインドの人々との繋りをもっていない。お坊さまの方がその大事な繋りをもっているじゃないか……」(206ページ）というとき，われわれもこれを頂門の一針と感ずるべきであろう。最後に，彼は日本仏教がなにも与えずに受け取るだけにおちたとし，これとの対比でシク教徒との接触の経験をあげているのはシク研究の手がかりとしても有用である（240～244ページ)。

（在ロンドン海外調査員　山口博一）